ジュディハピ！2

第一章　接触

ついに姫川さんが転校してくる前日となってしまった。

あと何日だの何だの言っているうちに、気付けば運命の日の一日前――しかももう昼休みだ。

日記を読み返すことで、私、平田加奈子は、ある日「高校二年生」の一年間が何度も繰り返されているということを思い出した。その原因となっているのが、これから転入してくる姫川さんだ。

それに気付いた以上、私は学園を本来あるべき姿に戻すため、姫川さんについて調べて、ループを抜け出す糸口をつかまなくてはならない。

しかし、姫川さんが現れる日はもう目前に迫っている。

とりあえず転校後は姫川さんとの接触を避け、引き続き情報を集めることにした。

私は前回のループの折、『隠し教室』という西校舎の秘密の一室で出会い、色々とサポートしてくれる四宮樹里先輩にそう伝えた。

樹里先輩もまた学園を救おうと、前回のループで姫川さんに立ち向かったのだが、そのせいで今回のループでは学園からその存在を消されてしまった。しかし、愛の女神であるアシェリーに助けられて、今は何とか鏡の世界、つまり異次元のようなところに存在できている。

先輩は、姫川さんと接触しないという点には同意しつつ、情報収集については、「どんな噂も鵜呑みにせず、自分の目で確かめた方が良いわ」とアドバイスをくれた。
「一緒に頑張りましょうね」と微笑まれてやる気が増した私は、気合十分で隠し教室を後にする。
対策の練り直しを考えつつ西校舎から本校舎へ向かっていると、渡り廊下で蹲る人物を発見した。
それは、担任の六井淵先生だった。イケてる顔の半分をマスクで隠していて、一目見ただけで絶不調だと分かる。
先生はプリントや教科書を床に落として、片膝をついている。激しい咳とクシャミで息をするのも辛そうだ。
私はそれを見て、思わず声を掛けてしまった。
「あの、大丈夫ですか？」
「ゲホゲホッ、ふぁ……ヘックシュン！」
それに反応して振り返った先生の目には、涙が浮かんでいた。
「ゴホッ、ひ、平田か？」
「はい平田です。先生、保健室に行った方が良くないですか？」
「いや、病気ではないから大丈夫だ」
「え、それ絶対に病気ですよ。咳とクシャミが酷いみたいですね。熱は……？」
人様を見下ろすのは失礼なので、私も先生の隣に両膝をついて屈んだ。両膝からひんやりとした床の冷たさが伝わってくる。

六井先生の額には、うっすらと汗が浮かんでいた。額に前髪が張り付き、弱った顔をしているので、イケメン度が低下している。
こんな風に弱った先生がうろうろしていたら、介抱したいという女子が集まって、普段と違った意味で騒がしくなると思った。それはそれでウザイ。だから私は、ブレザーのポケットに入れていたハンカチで先生の汗を拭いてあげた。ついでに額に触れてみる。うん、どうやら熱はないみたいだ。
そんな私の行動に、六井先生は涙で潤んでいた目をこれでもかと大きく見開くと、急に目頭を押さえて俯いてしまった。
目が痛いのかなと思いつつ先生の額から手を離し、汗を拭いた面を内側にしてハンカチをしまう。
「六井先生、保健室に行きましょう？　歩くのが辛いなら、私が支えてお連れします」
「っ、平田……」
先生には明日、朝のHRで「転校生として紹介された姫川さんとイチャつく」という茶番を繰り広げてもらわなくてはならない。体調不良で休まれでもしたら、私の心構えが無駄になってしまう。
薄情かもしれないが、今までのループから大幅に逸れ、これ以上予想外のことが起こるのだけは避けたい。だから私は、いざとなったら先生を引きずってでも保健室へ連れていこうと考えたのだ。
もちろん、「保健室の魔法使い」という恥ずかしい二つ名を持つドジっ子先生――丘野裕貴先生がいる第二保健室ではなく、ボンレスハムのような肢体が魅力的な中年女性の養護教諭がいる第一保健室へだ。
しかし、六井先生は私の提案に首を横に振った。そして、床に散らばっていた物を拾い始める。

見ているだけなのもどうかと思ったので、私も近くにあったプリントに手を伸ばした。そのプリントには、数字の羅列。そういえば午後一番の授業は六井先生の数学だったっけ。
先生が立ち上がったので私もそれに倣い、拾ったプリントを手渡す。先生の顔を見上げると、穏やかな目と視線が交差した。咳もクシャミも少し落ち着いたようだ。
「悪かったな。体調の方はしばらくすれば治るから。よければ授業までまだ時間もあるし、少し話し相手になってくれないか？」
「それは別に構いませんが、風邪でないなら花粉症ですか？」
「いや、俺は花粉症になったことはないな」
「はあ、でも花粉症は急に発症することもあるそうですよ。親戚のおじさんは、生活習慣が変わって花粉症になったと言っていました。……耳鼻科の先生に否定されていましたけど」
こんなに鼻をグズグズにして涙目なのだから花粉症だと思うのだが、先生本人はそれを否定する。
私の言葉に何か引っかかりを感じたのか、先生は話を続けた。
「生活習慣の変化か。――そういえば、今月はまだ実家に顔を出してないな」
「ご実家で何か用事でもあるんですか？」
「ああ、俺は実家から少し離れたところで一人暮らしをしているんだが、月一で顔を見せに来るように言われてるんだ。隣町の六井戸神社って知らないか？　俺の実家なんだよ」
「あ、知ってます。縁結びで有名な神社ですよね？　やっぱりその名の通り、井戸が六つあるんですか？」

「いや、そうじゃない。六井戸神社は昔、結ぶ糸と書いて結糸神社と呼ばれてたんだ。それが色々あって今の名前になった」
「結ぶ糸……、確かにそれなら縁結びっぽいですね」
「平田は六井戸神社に参拝したことがないのか？」
「はぁ、縁結びとは縁のない生活をしているので。それに私の願いは神様に頼って叶うようなものではありませんから」
神頼みで願いが叶うなら、財布のお金を全部賽銭箱に投げ入れて樹里先輩を私のいる世界に帰してくれと祈るに決まっている。学園を姫川さんから守れるよう祈願するのもありだが、まず樹里先輩がいないと話にならない。私の中の優先順位はいつだって、樹里先輩が最初に来るのだから。
しかし、先生の実家が神社だなんて初耳だった。ファンクラブのメンバーなら知っていて当然のことなのかもしれないが。
縁結びの神社なのに、何故かお札を持ってお祓いをする先生の姿が頭に浮かんでしまった。
先生はいつもホストのような身なりをしているので、宮司や陰陽師の衣装が似合わなくて少し笑える。
その時、マナーモードにしている携帯がポケットの中で揺れた。だけど、今は先生の前なので確認するのは後にしよう。
私は顔がニヤけそうになるのを何とか我慢して、次の疑問を口にした。
「ご実家が神社ということですが、先生には霊感があるのですか？」

「そんなものがあったら学園の教師になんてならねーよ。学園って、いかにも幽霊が出そうなところじゃねぇか」
「あぁ、心霊スポットの一つですものね」
「それに、俺はもともと他の兄弟と違って素質がゼロなんだよ。最初から実家を継ぐっつー選択肢はないんだ」
〝陰陽師・六井湍登場〟の期待が消え去ってガッカリしたけれど、きっと先生には教職が一番向いていると思う。
自信家で、見た目は派手だが、同時に生徒思いで真面目で良い先生なのだ。それが明日からは姫川さんに魅了されて、彼女を贔屓する残念な教師になってしまうのかと思うと悲しくなる。
じっと先生を見つめていたら、ふと、先生が何か姫川さんの情報を知っているかもしれないと思った。
担任になるのだからそうだとしてもおかしくないし、生徒会顧問で理事長と接する機会も多いから、より詳しい情報を持っている可能性だってある。
私は作り話を少し交えながら、質問を投げかけた。
「先生、噂で聞いたんですが、転校生が来るって本当ですか？」
「理事長から口止めされてるのに、もう広まっているのか」
「く、口止め？　どうして理事長が口止めなんか……」
「詳しくは聞いてないから何とも言えないが、確かに明日、うちのクラスに女子が一人転校してくるぞ」
「この時期に転校生なんて珍しいですね」
「まあな。急に決まったことだから、俺達も対応に少し困っているくらいだ。今日だって、午後に学園を見学しに来るという連絡がついさっき入ったんだぞ？」
「……は？」
一瞬、思考が停止してしまった。
聞き違いであって欲しいが、先生は確かに「転校生が今日の午後に学園見学に来る」と言った。
血の気が引くとは、このような感覚のことを言うのだろうか。戦慄が頭の先から足先まで一気に走った。私は膝がガクガクと震えるのを必死に抑えようとする。
「そっ、それ、いつ決まったんですか？」
「昼休みに入ってからだ。急に連絡が来たと思ったら、案内役の生徒を寄越せだとよ。こっちは忙しくて目が回りそうなのに」
そう言って先生は、教材とプリントを右手に抱え直す。マスクで顔の半分を隠しているが、その下ではウンザリという表情をしているに違いない。
一方、私の心臓は駆け足をした時のような速さで脈打ち、掌にはじんわりと汗をかいていた。
この前の休日も学園を歩き回っていたし、そもそもループを何度も繰り返しているのだから、転校生とはいえど今更見学など不要なはずだ。
何故こうも、私の知っている『未来』と違うことばかり起こるのだろうか。

当たり前だが、次から次へと浮かぶ疑問に答えてくれる人はいない。
だが心のどこかで、そんなことも起こるかもしれないとは考えていた。
それが少し早まっただけじゃないか、と冷静に判断する自分もいれば、何とかしないと、と慌てふためく情けない自分もいる。
ものすごく不安だ。誰かに背を押されたり、手を引いてもらったりしないと、一歩を踏み出す勇気が出ない。
すると先生が、私の額にかかっている前髪を大きな手で払い上げてきた。
急に黙ってしまったので体調不良だと思ったのか、熱でもはかっているような仕草だ。それが私を思考の渦から現実に引き戻してくれた。
「また具合が悪いのか？　俺のことを心配してる場合じゃないだろ」
「え、あ、そうでしょうか……」
「次は俺の授業だったな。欠席扱いにしておくから、今すぐ保健室に行け」
「いいえ――あっ、やっぱり保健室に行きます！」
具合は悪くないが、授業を抜けて姫川さんの様子を窺うためには保健室に行くという案がとても有効だ。そう思い直し、首を縦に振った。
六井先生に頭を下げて廊下を駆けだした私の心には、天使の皮をかぶった悪魔である姫川さんに立ち向かうための、小さな勇気が宿っていた。
その道中、先生と話している時に携帯が震えたのを思い出し、携帯を開いて画面を確認する。

すると、三宮くんからのメールが届いていた。連絡先を交換して以来、彼は今まで以上に馴れ馴れしい態度で接してくる。面倒なので普段はあまり相手にしていないが、今は状況が違う。
その内容は――『速報！　転校生が急遽、今日の午後に学園を見学しに来るんだって』という、今まさに六井先生から聞いた情報だった。
私は、二つ折りの携帯を静かに閉じた。

午後の授業開始を告げる鐘はすでに鳴り終わった。
前回の記憶が正しければ、姫川さんは案内役とここで接触するはずだ――
その様子を観察するため、校門近くの茂みに身を隠した。
私の手には、先程第一保健室で手に入れた早退許可証。
この学園では、早退するのに教員の許可が必要となる。だから私は、第一保健室の先生に体調不良を訴えて一筆お願いした。
嘘ばかりついている私を、疑いもせず心配してくれた先生に対し申し訳ない気持ちでいっぱいになる。保健室の先生にも六井先生にも、「ごめんなさい」と心の中で謝った。
……第二保健室？　そこはドジっ子魔法使いを目当てに集まる女子生徒達でごった返しているので、最初から行くつもりなんてなかった。とりあえずドジっ子魔法使いは、「ケガや体調不良の生徒が減ったことは喜ばしいが、少し寂しい」と言っていた第一保健室の先生に土下座すればいいと思う。

そんなことを考えながら茂みに隠れて校門を見張る。
やがて数分経過した。しかし未だに誰も現れる気配はない。
まあ、ヒロインやヒーローの登場が遅れるのは映画やドラマの鉄則なので、それも仕方ない。この場合のヒロインは姫川さん、迎え入れるヒーローは生徒会の誰かだ。すでに消えてしまって手元にはないが、確か日記には案内役になったのは生徒会副会長の二宮玲先輩だったと記されていた。
だが、前回から少しずつズレが生じている今回のループでは、更なるズレが生じる可能性は否定できない。
速報メールをくれた三宮くんに詳細を確認しようかとも思ったが、私が姫川さんに興味を持っていることを知られてはまずいと判断し、やめておいた。
最初は「転校生ってどんな人かと思って」と言えば済むが、その後何かを聞く時に同じ言い訳は通用しない。後に姫川さんの取り巻きになる三宮くんに疑われる要因を増やすのは避けたかった。
それに――三宮くんと仲良くなってしまうと、姫川さんに溺れる彼の姿を見るのが余計悲しくなる。
結局、私一人の力では何もできないのだ。
きっと、もうすぐ二宮先輩が現れるに違いない。何度も繰り返されてきたループで、変わることのなかった部分だから、今回も同じはずだ。
私は不安に耐えながら、自分自身にそう言い聞かせた。

それから更に五分ほど待つと、校舎の方から一人の男子生徒が校門に向かってくる姿が見えた。
予想通り、学園の生徒の中で二番目の権力を誇る副会長、二宮先輩だった。
イギリス人とのハーフなので、金髪に青い瞳という日本人離れした容姿だ。スラリとした肢体と上品な仕草は、まるで童話に登場する王子様で、多くの女子生徒の憧れの的だった。
その絶大な人気を誇る彼が、今回も姫川さんの案内役のようだ。
副会長は校門の前に立つと、胸ポケットから携帯電話を取り出し、どこかに連絡を入れている。短い会話を終えて電話を切ると、門が自動的に開いた。連絡先は警備会社だったのだろう。
彼はチラリと腕時計を見て、次に辺りを見回した。そして軽く溜息を吐くと、腕を組む。
最初は腕を組んだ状態でトントンと指で軽くリズムをとる程度だったが、やがて指の力が増し、顔にも苛立ちが出るようになった。
生徒会の仕事で忙しいにもかかわらず、案内役を頼まれたことに不満を抱いているのだろう。
副会長の様子をハラハラしながら見守っていると、甲高いブレーキ音と共に黒塗りの外車が門の前で停まった。運転手が開けたドアから柔らかな明るい髪を揺らして降り立ったのは、やはり姫川さんだった。
学園には良家の子息令嬢が通っているので、車での送迎が許可されているが、こんな風に堂々と校門に車を停めるのは稀だ。
昔はたくさんの生徒が校門まで乗りつけていたが、毎日登下校時に混み合っていた。それを見た現・生徒会の三年生が、いつからか学園近くで車を降り、徒歩で登校するようになった。

学園の顔である彼等が生徒達の手本となることは、暗黙の了解でもあった。それは昔から変わらない学園のルールだ。そのため今はほとんどの生徒が学園近くで車を降り、徒歩で登校している。
そうした経緯を知らない学園外部の人だから仕方がないか。いや、今回は姫川さんだから許容されてるのかもしれない。
姫川さんは、運転手に学生鞄と重そうな紙袋を持たせていた。彼女はスカートの裾を翻して門をくぐり、運転手が差し出す鞄を受け取ったが、そちらには視線すら向けない。いやいや、せめてお礼は言おうよ……
姫川さんはゆっくりとした足取りで副会長に近づき正面に立つと、にっこりとして言った。
「あなたが私を案内してくれる人ですかぁ？」
その言葉の後に、「久しぶり」と聞こえたような気がしたのは私だけだろうか。
計算し尽くされた可愛らしい仕草で、副会長を見上げる姫川さん。初対面の人にはさぞかし良い印象を与えるだろう。
現に、ついさっきまで顔を歪めていた副会長も、姫川さんに笑顔で自己紹介をしている。
「初めまして。理事長から貴女の案内役を任されました、生徒会副会長の二宮玲です。貴女の一学年上の三年生です」
「私は二年二組に編入することになった姫川愛華です。――あ、あの……」
「どうかしましたか？」
「えっと、二宮先輩はどうしてそんな風に無理やり作り笑いをしているんですかぁ？」

「僕が作り笑いを？　ふふ、一体何のことでしょうか」
「私には分かるんですっ！　だって、本当の二宮先輩を見ようとしていますから……」
そう言いながら、姫川さんは副会長にズイッと一歩迫った。表情はよく見えなかったが、恐らく目に涙を溜め、けなげさをアピールしてるんだろう。
私がいる茂みからは、姫川さんよりも副会長の表情の方がよく見える。
だから、副会長が姫川さんに作り笑いを指摘されて一瞬戸惑いを見せたことはよく分かった。
それにしても……初対面の相手に笑顔を向けるのは一種の礼儀なのに、それを作り笑いだと、わざわざ口に出すのは失礼なんじゃないだろうか。
なので、今の姫川さんの言葉のどこに副会長の好感度を上昇させるポイントがあったのか、サッパリ不明だった。副会長もどこか怪訝そうだ。
「先輩の偽りの笑顔なんて見たくないんです。私の前では、本当の顔をしても大丈夫ですよ？」
「っ……本当の顔、ですか？」
「恐がらないで下さい、私は先輩の全てを受け止めます。そんな風に辛そうな顔をする先輩を助けたいんですっ……!!」
そう言って、姫川さんが副会長の手を握った瞬間――ぶわっと辺りに甘ったるい香りがあふれ、私は思わず顔を背ける。お世辞にも良い香りとは言い難い。
離れた位置にいる私でさえそう思ったのだから、至近距離でそれを受けたら？　急いで二人の様子を窺うと、そこには目をトロンとさせた副会長の姿があった。

つい先程まで姫川さんに対して訝しげだったのが一転、とろけるような微笑みを向けている。
その豹変ぶりに、私は思わず声を漏らしそうになって慌てて口元を手で押さえた。
「――そこまで僕のことを真剣に考えてくれた人は、キミが初めてです」
「うふふ。私は当然のことをしているだけですよ、二宮先輩」
「玲と……僕のことはぜひ玲と呼んで下さい。もちろん敬語も必要ありませんよ、……愛華」
「うんっ。これからはそうするね、玲先輩！」
姫川さんの手に自らの手を重ね、宝物に触れるように優しく撫でる副会長。
情報通の親友、絵理から教えてもらったところによると、副会長は他人と馴れ合うことを嫌っていたはず。その副会長が名前で呼んで欲しいと懇願し、慈しむように姫川さんの名を口にしているなんて。
これが姫川さんの魅了の魔法なのか、と心の中で呟いて、口元を押さえた手に力を込めた。
姫川さんを優しく抱き寄せて頬に口づけをする副会長と、それを咎めない姫川さん。
真っ赤になりながら口づけられた頬を押さえて俯いた姫川さんだが、すぐに受け入れる体勢に変わっていった。口では「恥ずかしい」と言いながらも、副会長に自ら身体を密着させたり、顔を近づけて囁き返したりしている。
彼女の容姿は天使のようだが、地面に映る彼女の黒い影に、悪魔みたいな鋭く尖った翼と尻尾が見えるような気がした。
何こいつら、付き合ってるの？　とツッコミを入れたくなった。それでもじっと黙っていなければならないという苦痛を茂みの中で味わう。
そんな時間がしばらく続いたのだが、思いがけない人物達が、副会長と姫川さんのベタベタを妨害してくれた。
パタパタと足音を立てながら駆けてくるのは、茶髪に緑目の、同じ顔をした二人。副会長と同じく生徒会で書記と庶務を務める五宮兄弟だった。
「あーっ、ふくかいちょーが女の子とイチャイチャしてる！　もしかして、その子が転校生ー!?」
「酷いっ！　ボク達もお話ししてみたいのに、ふくかいちょー抜け駆けぇー!!」
「伊織に伊吹……。何故ここにいるのですか？　僕は同行を許可した覚えはありませんよ」
「「お願いしても許可なんかもらえないって、分かってるもーん」」
「え……、あれ？　案内って、玲先輩だけじゃなかったの？」
姫川さんが双子をどんな目で見ているのかは、私の位置から見えない。けれど、姫川さんの声の調子から、予期せぬ双子の登場に驚いているということが窺えた。
驚きたくなるのもよく分かる。今までのループでは、案内役といえば副会長と決まっていたからだ。
もちろん双子はそんな事情など知るよしもなく、姫川さんの質問にニコニコしながら答えた。
「案内はふくかいちょーのお仕事だよー」
「ボク達は勝手に来ちゃっただけー」
「そうなんだ。でも来てくれてありがとう！」
「まったく、愛華がこう言っているので許しますが……本当にどうしようもないですね」

「ごめんね？　でもふくかいちょーが女の子に近づいているなんて珍しいよねー」
「そうそう、二人っきりだなんて怪しいよねー」
両手を合わせて頭を下げ謝罪のポーズをとる双子に、反省した様子はない。彼等は姫川さんが気になるようで、声を揃えて尋ねた。
「もしかしてその子、ふくかいちょーの特別ー？」
「ええ、愛華は僕のお姫様ですから、特別な存在です。二人とも良い推察ですね」
「うふふっ！」
その言葉を否定しない辺りが姫川さんらしいと思う。あと、副会長は発言が桃色すぎて恐い。
双子の登場によって、副会長と姫川さんの表情が見づらくなってしまったが、逆に双子達の顔はよく見える。
目を凝らして双子の様子を見ていたのだが、少し違和感を覚えた。同じ顔に同じ声をしている双子でも、どこかバラバラという気がしたのだ。
「お姫様ぁ？　じゃあふくかいちょーが王子様なんだ！　あははっ、見た目通りすぎー！」
「ど、どうしたのー？　何か今日のふくかいちょー、変じゃない？」
やはりそうだ。双子は、副会長の発言に対して明らかに異なる反応を示している。
彼等はいつも共通の話題を口にし、互いに言葉を被せるように話し、同じような反応を見せる。だが今は一方が明るく笑い、もう一方が不安そうに副会長を見つめていた。
副会長は双子の片方の発言にさも心外そうに顔を歪める。

「僕が変だなんて、随分と失礼ですね。そう言うキミは……伊織ですか？」
「えーっ！　ちがうよー、伊織はボクで、こっちは伊吹！」
「ああ、そうでしたか。それはすみません」
「え？　あれ？　ふ、ふくかいちょーって、ボク達の見分けがついてたよね？」
「見分け？　さぁ、そんなことはできませんが」
「そうだよ伊吹！　ボク達を見分けるなんて誰にもできないよー」
「い、伊織？　でも生徒会の先輩達は皆ボク達を――」
「もうっ、私を仲間はずれにして何の話？　酷いわ！」
姫川さんが大きな声を出した途端、ぶわっと、またあの香りがあふれた。
先程より強くなったそれが私の頭の奥を刺激する。思わず片手で鼻を押さえてしまった。
香りの発生源である姫川さんは、双子と副会長のやり取りに割って入り、強制的に自分に意識を向けさせた。
私は、香りを直接受けた副会長の反応を確認しようとしたが、あいにく位置が悪くて表情は分からない。
代わりに、よく見える位置にいる双子達は――これまた見事に、二人バラバラの反応を示していた。
双子の一人は、キラキラと瞳を輝かせ、頬もほんのりと上気している。そして上機嫌で姫川さんに近づいたと思ったら、その手を取ってニッコリと笑った。
ちなみに、姫川さんのもう片方の手は副会長が取り、その甲にキスを送っている。うわぁ。

双子のもう一人は、私と同じく鼻を押さえていた。自分の片割れと副会長の行動が信じられないというように、目を見開いている。じゃりっと彼が一歩後退る音が、私の耳に届いた。
「申し訳ありません、愛華。でも僕の最優先は愛華ですから怒らないで下さいね」
「別に怒ってないもん。ちょっと拗ねてただけだもん」
「ごめんねー、仲間はずれになんてしてないよ？　だから愛ちゃんも一緒にお話ししよう！」
「ふふふ、怒った愛華も拗ねる愛華も可愛らしくて、微笑ましいですね」
「うん、愛ちゃんって本当に可愛いよねー」
「ま、またみんなでそんなことを言って！　許してあげるのは今回だけなんだからね？」
その「みんな」の中に双子の一人が入っていないことに、姫川さんは気付いていないのだろうか。
可愛いだの何だのと褒め称えられ、否定もせずに笑っている自分を、双子の一人が警戒した目で見ていることが分からないのだろうか。それは姫川さんの手を握っている二人にも言えることだが。
伊織と呼ばれた方の双子は、握っていた姫川さんの手を離すと、不信感を露わにする片割れの肩に触れ、姫川さんのさっきの質問に答える。
「今ね、ふくかいちょーがボク達を見分けられないって言ってたんだぁ」
「そうなの？　でもそれって悲しいよね。私なら絶対に見分けることができるのに」
「わぁ本当⁉　ねぇねぇ伊吹聞いた？　愛ちゃんがボク達を見分けてくれるんだって！」
「……っ」
双子の片割れが息を呑む。

「本当に心まで美しい人ですね、僕のお姫様は。その優しさを向けられる二人に、少し嫉妬してしまいます」
姫川さんの言葉に、飛びついてピョンピョンと飛び跳ねる双子の一人と、姫川さんを褒め称える副会長。だが、もう一人の双子は、姫川さんに気付かれないよう、そっと一歩距離を取っていた。
伊織という双子の片割れが姫川さんの手を握ったり、抱きついたりすると副会長が引き離すが、伊織はすぐまた抱きついている。
すると伊吹という双子の片割れが、急に目を瞑って頭を横に振った。そして驚くことに、彼も姫川さんに飛びついて称賛し出したではないか。
私は混乱した。彼は自らの意志でそうしたのか、それともやはり姫川さんの魅了の魔法にかかったのか。
姫川さんに両側から抱きついて笑い合う双子の顔は、今は全く同じ。嫉妬心を燃やして双子を姫川さんから引き離そうとしている副会長の目は、異常なほどギラギラしている。
そんな彼等に呆れたように、そして困ったように笑う姫川さん。
このシーンだけを目にすれば、微笑ましい光景だと思う人もいるかもしれない。けれど、私にはそうは思えなかった。容姿の整った者達が集まり、キラキラと輝く笑顔を振りまいていても、何故か彼等の周りの空間が歪んでいるように見える。
それは恐らく、私が姫川さんを中心とする美しい世界の中で異質な存在であり、かつ彼女を嫌悪しているからだと思う。

天使のような顔で微笑んでも、姫川さんは綺麗な人なんかじゃない。私の大切なものをたくさん奪って、多くの人の思いを踏みにじっておきながら幸せそうに微笑む人を、綺麗だと思えるはずがない。

私は握りこぶしを作り、強くそう思った。

しばらくして、急に「あっ！」と声を上げた双子の一人が、姫川さんと副会長に向かって言った。

「すっかり忘れてたけど、理事長から生徒会室に連絡があったんだよー」

「そうそう、ボクも思い出した！　学園案内の前に、愛ちゃんは理事長室に寄るように、だってー」

「理事長室に？　叔父様がお呼びなのかしら。二人とも、それを知らせに来てくれたのね。わざわざありがとう」

「……何故キミ達は、ここに来る前にまずその連絡を僕に寄越さなかったのですか？」

「えー、確かにほーちゃんは電話しろって言ったけどぉー」

「んー、確かにほーちゃんはボク達が行く必要ないって言ったけどー」

そこで一度言葉を切った双子は、ニヤリと同じ笑みを浮かべて元気よく言い放った。

「「愛ちゃんに興味があったから、仕方ないよねーー！」」

声を揃えて笑う双子を見て、副会長が険悪な空気を醸(かも)し出す。

しかしこの双子にこれ以上何を言っても無駄だと悟っているのか、すぐに溜息を吐いて彼等に指示を出した。

「理事長をお待たせしているのなら、キミ達が愛華を理事長室へ案内しなさい」

「えっ、玲先輩は一緒に案内をしてくれないの？」

「申し訳ありません。ですが、あそこに置いてあるのは愛華の荷物でしょう？　貴女の大切なものをそのままにしておくことはできません。僕が運んでおきますから、愛華は彼等と一緒に理事長室へ向かって下さい」

副会長の視線の先に、姫川さんの運転手が下ろした重そうな紙袋があった。姫川さんを乗せてきた外車は、いつの間にか帰ってしまったようだ。

「あれ、手違いで家に届いてしまった教科書よ。少し重いけど……いいの？」

「ええ、何も問題ありません。こう見えても、力はある方なのですよ？」

「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな。ありがとう玲先輩！」

「愛華のためなら、当然のことです」

とろけるような表情で言った副会長に、姫川さんはポッと頬を赤く染める。

女子生徒達に騒がれるだけあって、副会長の笑顔は素敵だ。なんとなくだが、今の姫川さんの反応は計算ではなく、素でときめいて出てきたものではないかと思った。

副会長は、双子に手を引かれて去っていく姫川さんの後ろ姿をしばらく眺めていた。そして、三人が校舎内に入ったのを確認し、携帯を取り出す。

彼が電話の相手に――恐らく警備会社だろう――手短に何かを伝えると、校門が動き始めた。

金属がぶつかるガチャンという音がして、門が完全に閉まる。それを見届けた副会長は、独り言にしては随分と大きな声を出した。

「さて、これでゆっくり話ができますね」
その言葉に、ぞくっと背中に悪寒が走った。
まさか、と最悪の可能性を浮かべながら、茂みの中で息を殺して副会長の次の言葉を待つ。だが、何も聞こえてこない。自分の思い過ごしであって欲しいと心から祈りつつ、茂みの隙間から副会長を覗き見た。
すると同じタイミングで、副会長が王子様のような笑顔でこちらに向き直ったのだ。
「出てきてもらえますか？　もちろん、そこの茂みで盗み聞きしている貴女のことですよ」
そう言ってニッコリ笑った副会長のオーラには魔王みたいな威圧感があり、ひどく濁って歪んでいるように見えた。
平田加奈子、絶体絶命みたいです――
物語のヒロインなら、ここで素敵な王子様が助けに来てくれるはずだけど、私はヒロインでないうえに、ピンチに追い込んでいるのが王子様と称される人なのだから、どうしようもない。
この危機的状況をどうやり過ごすべきか、頭をフル回転させていると、いくつか案が浮かんできた。
第一の案は、自ら副会長に近づくことだ。彼には多くのファンがいるのだから、茂みに隠れてこっそり憧れの人を観察するという気持ち悪いファンがいてもおかしくない。いや、本当はおかしいけど、そう思うことにする。
いや、待てよ。元来、彼は騒がれることが好きではなく、自分の親衛隊であれファンであれ、毛嫌いしていた。

だから、ここで私がしくじれば、親衛隊やファンクラブが解散に追い込まれる可能性だってある。そしてその原因となった私は、副会長を支持する女子生徒達からフルボッコにされ……よし、この案は却下する。

次なる案は、私を助けてくれるヒーローの登場を待つことだ。……なんて考えてみたが、そんな人物に心当たりはないうえに、期待するだけ無駄なので却下に。

続けて浮かんだ案は、私はたった今ここに来たばかりで、こんなところで副会長に会ったのは偶然だと驚いてみせること。しかし、うまくやる自信がないし、副会長はこっちが言い逃れできないような質問をしそうなので却下。

最後の案は、私がたまたま茂みにいたら、副会長がやって来たと説明することだ。嘘には違いないが、少し本当のことを混ぜて言うと、真実味を持たせることができる。

この最後の案を使えば何とか言い逃れができるかもしれない。そう思い、私はようやく茂みから出た。

緊張のあまり固く手を握り締めてしまい、更には立ち上がるだけでも相当力を使ってしまった。

「ああ、やっと出てきて下さったのですね。もう少し遅かったら、僕の手で引きずり出そうと思っていたところでした」

「すみません、覗き見をするつもりはなかったのですが……」

セ、セーフ！　髪の毛を掴まれて引きずり出されるという恐怖体験は回避できたようだ。

「まったく面倒ですね。早く愛華のところへ行かなくてはならないというのに。では、覗き見をしていたという事実を覆す、素晴らしい言い訳をお聞きしましょうか」

「い、言い訳ですか」

「何か不満でも？　なら、逃げ口上でも仰るつもりでしょうか。どちらも似たようなものですし、そもそもその行動自体褒められたものではありませんが」

副会長の笑顔に底知れない恐怖を感じた私は、ブルッと身体を震わせ、覚悟を決めた。何の覚悟かって？　副会長に嘘をつき通す覚悟ですよ。

「あの、何か誤解されているようですが、私は副会長が現れる前からこの場にいました」

日本人離れした青い瞳を見つめ返しながら、嘘の中にほんの少し事実を混ぜて伝える。

副会長はそんな私の言い分を否定しなかったものの、訝しげな様子のまま次の言葉を口にした。

「そうでしょうね。僕の後にキミが現れたのなら、すぐに気付くはずですから」

その口調は、さっき姫川さんに優しく語りかけていた時とは大違いの、刺々しいものだった。あまりに激しい落差を感じて、魅了の魔法は厄介だと改めて痛感した。

でもまあ、そうでなくても、彼はいつも親衛隊やファンクラブの女子にこんな態度をしているのだ。これが彼のデフォルトなんだろう。

「ならば、何故その場に居続けたのかを説明して下さい。覗き見や盗み聞きをしたと疑われることに抵抗があるなら、その場をすぐに離れるべきだったのではありませんか？」

「そ、それは私も副会長の仰る通りだ思います。結果的に立ち聞きしてしまったことも申し訳なく感じています」

「なるほど、その程度の常識はあるのですね。安心しました。しかし今は、謝罪ではなく説明を求めているのです。続きを答えて下さい」
細く長い腕を優雅に組んだまま、私の回答を待つ副会長。その迫力のある空気に呑まれそうになる。
次なる嘘を口にしようとして、胸の奥がチクッと痛んだ。ついさっき、いつも親切にしてくれる第一保健室の先生を騙してきたばかりだからだ。
立ち上がる時に握り締めていた早退許可証のシワを丁寧に伸ばしながら副会長に差し出した。
彼は、品定めをするような目で許可証を見た。その目があまりに真剣なので、私の掌には汗がにじんできた。だがそれを悟られるわけにいかない。私は声が震えないようにと、腹の奥の方に力を入れた。
「体調不良で早退する途中でした。これがその早退許可証です。茂みにいたのは、少し具合が悪くなって休憩していたからです」
「念のため、確認させて頂いても？」
許可証は嘘をついて手に入れたものだけど、正真正銘本物だ。
学園側から配布されている教師の名前入り承認印を、副会長が見誤ることはないだろう。
その長い指が許可証に記された文字の列をなぞる。やがてそれが止まると、副会長はゆっくり顔を上げ、その視線を私に注ぐ。そして先程姫川さんの頬を赤く染めさせた時と同じ笑顔を見せた。
許可証が本物だと認めてくれたのだと思った。が次の瞬間、副会長はそれをビリビリと破り捨ててしまった。

私はその残骸が風に乗って校門付近に散らばるのを、呆然と見ていることしかできなかった。
「な、何を……」
やっとの思いで言葉を紡いだが、声は小さく掠れている。
「確かに許可証は本物です。しかしキミの言い分まではどうでしょうね？　僕に嘘が通用すると本気で思っていたのですか？」
「わっ、私は嘘なんて――」
「早退途中なら、何故キミはその手に鞄を持っていないのでしょうか？　ああ、あの茂みにあるのですか？」
「……っ!!」
その指摘に、私はしまったというように思わず顔を歪めてしまう。
そんな反応に副会長がにっこりと微笑んだのを見て、私はこの場から逃げ出したくなった。
第一保健室から校門に直行したので私は今、手ぶらだった。鞄は茂みの中にあると言えば、取ってこいと言われるだろうし、何より今の私の反応からは嘘をついていたことが丸分かりだったろう。
焦る私に、副会長が歩み寄る。
距離がぐっと縮まり、王子様らしいと思っていた綺麗な微笑みの中に、人を見下す冷酷さが浮かんだ。
「自慢にはなりませんが、人の嘘には敏感な方だと思っています」
許可証を引き裂いた手が、私の方へ向かってきた。

「ひ、痛っ！　ヤダ、離して……！」
副会長の右手が私の髪を強く引っ張ったのだ。その方向に頭ごと持っていかれた。
「何故人は嘘をつくのでしょうか？　バレバレな嘘を、時には美しい笑みを浮かべながら」
口の片端を上げた副会長が危ない目で何か言っているが、私にはその言葉に反応する余裕はない。ぐいぐいと髪を引っ張られている頭部が悲鳴をあげ、これ以上やられたら禿げる！　と私に危険信号を送ってくる。
あまりの痛さに、じわっと涙がにじんで視界がぼやけてきた。副会長の手を全力で引きはがそうとするが、男女の力の差は圧倒的だ。絶望しそうになる。
恐い、痛い、誰か助けて、先輩、樹里先輩！
必死に助けを求めようとしても、息が詰まって声にならなかった。
すると、目に溜まった涙が零れ落ちる寸前、副会長の手に込められていた力が抜けた。
恐る恐る見上げると、不思議そうな表情の副会長と目が合う。
「キミから何か――首筋……？」
「え？　え、えぇっ!?」
なんと、副会長は私の後頭部に手を回してぐいっと引き寄せ、身体を密着させてきた。
彼は、何やらすんすんと私の耳元で鼻を鳴らしている。
恐らく匂いを嗅いで……って、ひいぃっ、何その羞恥プレイ！
私は、変態疑惑が浮上した副会長から慌てて距離を取った。

意外にも副会長はあっさりと解放してくれたのだが、その表情は腑に落ちないといった様子だ。
「校則により、香水等の香りの強いものを学生が使用することは禁止されているのですが」
「は、はあ？　別に何も使っていませんけど」
「また嘘ですか。なるほど、服装については風紀が管轄だから、咎められないと思っているのですね。いい加減にしてもらえますか？　僕も暇ではないのですよ」
「だったら私のことは放っておいて、早く理事長室に行ったらどうですか……」
「はい？　何故僕が用もないのに、理事長室に行かなければならないのですか。この忙しい時に、そんな場所で時間を無駄にできません」
「……は？」
「……なんですか、その間抜けな顔は」
この顔は生まれつきですけど、と心の中で反論しつつ、目が点になってしまった。
私が茂みの中から出るのを渋っている時に、副会長は早く姫川さんのところへ行きたいと言っていた。現在、姫川さんがいるのは理事長室。だけど、早くそこへ向かえばいいと言った私に対して、副会長は行かないと答えた。この変わりようは、誰が聞いても不思議に思うだろう。
首を傾げる私と、同じように首を傾げる副会長。同じ方向に首を傾げて向かい合う私達の間に、何とも言えない空気が漂う。
けれどそれは、第三者の介入によってぶち壊された。
「やっと見つけたぁ！　具合が悪いんだから、勝手にフラフラしちゃダメでしょ!?」

その明るい声がした方向を見ると、ドジっ子魔法使い――もとい第二保健室の丘野先生が走ってくるところだった。
白衣が真っ白だということは、ここに来るまで一度も転ばなかったということだ。以前、「迷子になる」と言って駄々をこねた先生を校門から職員室まで案内した時は、転倒しすぎて彼の服はボロボロになっていた。あれからだいぶ成長したじゃないかと、温かい気持ちになる。
が、私達のいる場所まであと数メートルというところで盛大にすっ転んだ。ああ、やっぱり成長してないんだな。
そんなドジっ子魔法使いに手を貸そうかと悩んでいると、副会長が先に手を差し出していた。
どうやら副会長は彼に訊きたいことがあるようだ。
「さっきの言葉はどういう意味でしょうか、丘野先生」
「え？　ああ、彼女の具合が悪いってこと？　一人で帰すのは危険だから、ボクが車で送ることになってるんだよ」
「先生が……？　だから彼女はこんなところにいたのですか」
「校門から車に乗ってもらう予定だったけど、道が混雑しているから場所を変えようと思ってね」
「――そう、なのですか」
えーっと、何それ初耳なんですけど。
当事者である私を放置してサクサクと交わされる会話に困惑する。もしかして第一保健室の先生が私を心配して、ドジっ子魔法使いを手配してくれたのだろうか。

……ドジっ子に付き添われても非常に心許ないのだが。
二人の会話に耳を向けていると、副会長が困惑したような表情でちらりと一度だけ私を見た。先程の恐怖が蘇り、ビクッと身体が反応してしまう。
これでまた副会長が不快になるかもしれないと焦ったが、彼は全く気にしておらず、ドジっ子と話を続けている。
「丘野先生、お手数をお掛けしますが、彼女に早退許可証を発行して頂けますか」
「別にいいけど、第一保健室でもらわなかったの？」
「手違いがあって、僕が無効にしてしまったのです」
副会長は素直にそう認めると、私の方へ向き直る。
「キミの言葉を疑って、申し訳ありませんでした」
きちんと謝ってくれたものの、どう聞いても心はまるで籠もっていない。
「え、いえいえ、怪しい行動をしていた私も悪いので、気にしないで下さい」
口先だけの謝罪に物申したくもなったが、仕返しが怖いので、慌てて首を横に振った。
許可証の再発行を頼んでくれたということは、私への疑いが少しは晴れたということだ。本当にそうなのかは怪しいけれど。
「ふーん？　よく分からないけど、とりあえず第二保健室に戻ろうか」
そう言ってくるドジっ子魔法使いに背を押されながら、私は第二保健室がある校舎に向かって歩き出した。

一方、副会長は私達とは別の方角に向かう。校門の脇に置かれたままの姫川さんの荷物を運ぶつもりなのだろう。

姫川さんの魅了の効果に驚きながらも、あの時――副会長が姫川さんへの関心を失ったあの一瞬が、彼女に対抗するための糸口になるかもしれない。そんな考えが私の心に浮かんできた。

同じ本校舎の中にあっても、第一保健室と第二保健室は真逆の位置にある。

第二保健室の辺りは第一と比べ、人通りがほとんどない。生徒達が授業を受ける教室から遠く離れているからだ。生徒達がここを通るのは、週に一時間程度の特別なカリキュラムを組まれた授業の時くらいだった。

陽光が差し込んでぽかぽか暖かい廊下を進み、「第二保健室」とプレートの掛かった部屋の前で足を止める。

ドジっ子魔法使い、もとい丘野先生が引き戸を開けて中に入るよう促(うなが)してくれるが、私は戸に貼られた紙から目が離せなかった。

その紙にはこう手書きされている。

――正式な利用目的以外での保健室入室はお断りします。ぷんぷん！――

丘野先生目当てで殺到する女子生徒を牽制するための貼り紙だと思うが、「ぷんぷん！」の部分に激しくイラッとした。

破り捨てたい衝動を何とか抑え、私は第二保健室へ足を踏み入れた。

「ようこそ第二保健室へ！　とりあえず、好きなところに座ってくれる？」

「あ、はい」

この学園は金持ち学園だけど、保健室の基本的な造りは他の学校と同じだ。

白いシーツの掛かったベッドが数台あり、一つ一つを区切るカーテンも真っ白で、ほのかに薬品の匂いがする静かな空間。

私は、休憩コーナーで休ませてもらうことにした。清潔そうな白いテーブルクロスが掛けられた長机と、丸椅子がいくつか置いてあるスペースだ。丸椅子には背もたれがないので、後ろに体重を掛けることができず、ちょっと座りにくい。

長机の上には、来室者の名前と利用目的を記入する用紙が置いてあった。丘野先生が使用しているであろうパソコンも置いてある。

めったに訪れない第二保健室を観察していると、長机を挟んで前の席にいた丘野先生から、可愛らしいウサギが描かれたマグカップを手渡された。その中身はココアだ。ひと口飲んでみると、とても甘い。単にお湯を注いだだけでなく、砂糖を足してわざと甘めにしているのは私の身体を気遣ってのことかもしれない。

保健室の時計の秒針が進む音と、私がココアを啜(すす)る音だけが響く。

向かいの席に座った丘野先生は、クマのイラストが描かれたマグカップを持ってニコニコしていた。

この静かな空気に包まれてやっと安心できた私は、そっと口を開いた。

「あの、体調が良くなってきたので、早退許可証の申請を取り消して欲しいのですが……」
「うん、そう言い出すんじゃないかと思ってた」
灰色の目を細めてカップを長机の上に置いた丘野先生に続き、私も同じようにカップを置いた。
理由も聞かずに承知してくれたことに感謝すると同時に、申し訳なくなってくる。
第一保健室の先生にも申し訳ないことをした。許可証を発行してくれただけでなく、早退する私を心配して、丘野先生に家まで送るよう言ってくれたのだから。
私は丘野先生に向かい、素直に頭を下げた。
「車の件もありがとうございました。でも授業に戻ることにします」
「車？　ああ、アレは嘘だよ。さっきの君達は一触即発の状態だったから、さすがに止めに入らなきゃと思ったんだ」
「はい？」
「まさか、女の子の髪を引っ張るとまでは思ってなかったから、焦ったよー」
「え、あの、もしかして先生……」
「二宮くんって、少し感情が不安定なのかな？　あの可愛い女の子と話している時と全然態度が違ってたし、驚いちゃった」
こ、このドジっ子、いつから見てたんだ……！
つまり丘野先生は、副会長が姫川さんにデレデレになったところからずっと見ていたのだ。
副会長に見つかっていないのだから、尾行も観察も私より上手いことは間違いない。

「いつから私を尾行していたんですか」
「え⁉　尾行なんてしてないよっ。ただ話がしたいと思ってたんだけど声を掛けるタイミングがなくて、結果的に覗き見する形になっちゃっただけで……」
私が不機嫌そうな低い声を出したので、先生は悲しそうな顔をした。それも当然か。私も先生と同じように、助けた人から疑われてしまったら、やはり衝撃を受けて気落ちしてしまうだろう。
私は失礼なことを言った自分を恥じた。
「……すみません、助けてもらったのに、尾行だなんて失礼なことを言いました」
「ううん、先生が平田さんを追い掛けて立ち聞きしちゃったのは本当だから、構わないよ。ごめんね？」
目に見えて落ち込んだ私を気遣ったのか、先生はブンブンと両手を胸の前で振り、気にしていないから大丈夫、と笑いながら大人の対応をする。
更には、「元気出してね？」と励ましてくれる。その言葉を受け止め、小さく何度か頷けば、先生も今度は安心したように笑った。
「あ、さっき先生は私に話があったと仰っていましたが、何のお話ですか？　それに、なんで私の名前を……？」
「話っていうのは、この間職員室まで案内してくれた時のお礼を改めて言いたいと思ったんだよ。君の名前を知っていたのは、早退許可証の控えを見たから。保健室の先生同士、情報を共有するために、早退許可証を発行した後は連絡がくるようになってるんだ」

長机の上のパソコンを操作して先生が見せてくれた画面には、私が第一保健室でもらった早退許可証と同じものが映し出されていた。
その許可証の学年とクラスと名前の部分をクリックすると、生徒情報に繋がるようになっていた。こうして表示された私の顔写真を見て、あの時のことを思い出しわざわざ追い掛けてきたのか。
「とても便利なシステムですね」
「でしょう？　こうして先生は平田さん……加奈ちゃんの情報をゲットしたのです、えっへん！」
別に先生が凄いわけでもないのに、得意そうに胸を張る先生に対して、「ぷんぷん！」の時と同じくらいイラッとした。
しかもこの先生、調子に乗って私を愛称で呼んだ。
ここで甘い顔を見せると、これ以降も好き勝手をされそうなので、私は毅然（きぜん）とした態度で言った。
「その呼び方、止めてもらえませんか」
「え、ダメ？　せっかく可愛い名前なんだから、呼ばないともったいないよ」
「ダメです。私をそう呼ぶのは親しい友人だけですので」
「じゃあ、先生とも親しくなろうよ。ねぇねぇ、先生達の関係って、言葉にするとどうなるのかな？」
「他人以上、知人以下だと思います」
「何それ酷い！　先生はショートケーキのスポンジとクリームみたいに甘い関係を期待してたのに！」
「意味が分かりません。それに、スポンジとクリームみたいな関係なら、ショートケーキに限定する意味はないと思います」
「加奈ちゃんのバカバカ！　ショートケーキにはイチゴが大切って知ってるくせに！」
「イチゴのことには一度も触れていなかった気がしますが、言い間違えたということですか？」
「そこは気付いても気付かないフリをするのが、イチゴの役目でしょ!!」
「ああ、私がイチゴなんですね……って、もう更に意味が分かりません！　丘野先生と話をしていると、頭が痛くなってきます!!」
ダメだこの先生。何がダメって、頭が一番ダメだ。
次第にヒートアップしてきた丘野先生は、向かいの席に座っていたにもかかわらず、わざわざ私の隣にやってきて、「加奈ちゃん」と「イチゴ」の同一人物説について熱弁をふるった。しまいには、私を見て「イチゴちゃん」と呟（つぶや）き、目を輝かせている。私は彼の言動に冷静に対処しているつもりだったが、今の言葉でついに匙（さじ）を投げた。
……でもちょっと待て。もしかして今後私の呼び名は「イチゴちゃん」になるのか？　冗談じゃない！
私は怒りのあまり、至近距離まで迫っていた丘野先生から離れようと、勢いよくのけぞった。
――が、それが痛恨のミスだった。
「ちょっと先生、何を言って――うひゃ!?」
「え？　あああっ！」
背もたれのない丸椅子に腰かけていた私がそんなに勢いよくのけぞったらどうなるか、少し考え

れば分かることだった。
まあ早い話が、バランスを崩して盛大に転げ落ちてしまったのだ。
丸椅子がカラカラと音を立てて転がるのを視界の端に見ながら、背中とお尻のズキズキという痛みに泣きたくなった。幸い、頭は打たなかったが、背中へのダメージがかなり大きい。
「〜〜〜〜い、ったー……もう今日は本当に呪われてるっ」
副会長には髪を引っ張られ、丘野先生にはイライラさせられ、あげくの果ては椅子から転げ落ちるという恥ずかしい失態。完全に今日は厄日だ。
「だだだ、大丈夫!? かなり派手に倒れちゃったけど、どこかぶつけて……な、い……」
丘野先生の言葉が不自然に途切れたのを訝しく思いながら、何とか上体を起こそうとしたその時……気付いてしまった。
——スカートが完全に捲れ上がってしまっていることに。
声にならない悲鳴を上げ、素早くスカートを直して裾を強く握ったが、時すでに遅し。
掌に嫌な汗がじとじと浮かぶのを感じながら恐る恐る顔を上げると、丘野先生は片手で口元を覆い、目を見開いていた。しかも授業中の生徒のように、片手を真っ直ぐ上に伸ばしている。先生、その行動は意味が分かりません。私の理解を完全にオーバーしています。
というか、確実にスカートの中を見られたと思う。見られたよ、ね？
私が不審な目で見ていることに気付いた先生は、自分のペースを貫き通すという最悪な方法で、今の疑問に対する答えを出した。

「感想を言っていいですか」
「は？　感想って……ダメです、絶対にダメです！」
「色は清純派だけど、意外と派手なデザインの下着にすごくときめきました」
「ダメだって言ったじゃないですか！　そんな感想必要ありません!!」
「だって加奈ちゃんの見た目から想像できない下着だったんだもん。ギャップにドキドキしちゃった。ねぇねぇ、もう一度見せてもらっていい？」
「な、ななな、何を言ってるんですか！　この変態っ！」
「ふふん、男は皆変態です」
ドヤ顔で開き直っている先生を殴り倒さなかったことを、誰かに褒めてもらいたい。
最悪だ、本当に最悪だ。
確かに今日の私の下着は、普段より格段に大人っぽいものだった。
弁解しておくが、これは絵理と一緒に買い物に行った際、その場のノリで購入してしまったものだ。昨夜お風呂に入る時、たまたまこの下着をタンスから持ってきてしまったのだが、取りかえるのが面倒だったからそのまま穿いたのだ。それが、この結果だ。
そんなことを先生に説明しても信じてもらえないだろうし、説明する気力もない。だから次に取る行動は決まっていた。
「し、失礼します！」
「ええっ！　加奈ちゃん、背中とお尻は大丈夫なの？　痛むなら、先生が触診してあげるよ？」

触診って何だ、セクハラのことか！　と胸中で叫びながら、私は脱兎の如く逃げ出した。
スカートが捲れるのを気にしながら逃亡するのは情けないが、仕方ない。
体調不良を理由に休んだ数学の授業も、もう終わりになる。
終了の鐘が鳴り響く本校舎の廊下を走り抜けながら、私は「二度と第二保健室になんか行くもんか！」と心に誓い、こっそり涙を流したのだった。

◆・♣・◆

うふふ。本当に何度遊んでも飽きないわ、この学園は！
昨日、校門でいつも通りのイベントをこなした副会長の玲先輩は、相変わらず笑顔が綺麗で素敵だった。
突然双子くん達が現れたのには驚いたけれど、前のループで「崩壊ＥＮＤ」という特殊なエンディングを迎えたのだから、少しくらい変化があってもおかしくないわよね。
何も気にする必要なんてないわ。だって私が愛されることには変わりないもの。
玲先輩は、心の中にある悲しくて汚い感情を私に受け入れて欲しいって必死に縋ってきてるのよ。だから私は玲先輩を受け入れるって言ってあげた。
すると、面白いくらい簡単に、私に夢中になったじゃない。うふふっ、やっぱり前のループと攻略の方法は変わってないわ。

玲先輩は、最初の接触さえ失敗しなければ、ずっと私が一番だって言う王子様でいてくれるから、とても扱いやすい。独占欲の塊だから、愛する私に自分以外の誰かが近づいただけで、その綺麗な顔を嫉妬に歪ませるのよ。
本当に気分がいいわ！　だってその顔を見れば、玲先輩の一番は私ってことがすぐに分かるもの。
双子くん達だってそうよ。
彼等は新しいオモチャを求めるように私を求め、私はそれに応えてあげるの。私をオモチャだと思っているのは少し面白くないけど、見逃してあげる。だって最終的に私のオモチャになるのは彼等だもの。
同じようで違い、違うようで同じ双子くん達は、本当は心のどこかで片割れに嫉妬している。そして同時に、お互いをとても必要としているの。
でも二人セットでいる時は、一方からしか好感を持たれないことが多いのよね。校門で弟の伊吹くんの反応が微妙だったのも、そういうわけ。でも私は気にしない。双子は個別に攻略すればいいんだもの。
ふふ、そもそも今回のループでは、待ちに待った新キャラを攻略するつもりだから、他は適当でいいわ！
携帯の攻略キャラ画面――ああ、ここでみんなの好感度や情報が確認できるのね――今はその姿を確認することはできないけれど、彼も私を守ってくれる王子様になるはず。そうよ、私を守ろうとしない王子様なんて、この世界に存在しないんだから！

生徒会の三人に出会うイベントは昨日終わらせたから、転校初日の今日から本番ね。
私は目の前の校舎を見上げる。
朝から私の話題で持ち切りのはず。「あの美少女は誰？」って囁き合う声が今から聞こえるようだわ。
そして、すぐにみんな私に会いに来るの。私の美しさと優しい心に一目で魅了された彼等は、私に全てを奪われるんだわ。騒ぎを聞きつけた風紀委員達も、顧問の先生達も、未だ見ぬ新しい攻略対象のイケメンも！
とりあえず今日は、担任になる六井湍先生と第一イベントを済ませないとね？
私はまず職員室に向かい、扉を開けた。
そして転校生であることを伝えると、派手な見た目のイケメン先生が私に近寄ってくる。ああ、やっぱり湍先生もカッコイイ！
「お前が転校生の姫川か。俺は担任の六井湍だ、よろしくな」
「はい！　でも失礼ですが……湍先生って、なんだかホストみたいですね？」
「は？　お前、初対面の相手に本当に失礼なことを言うんだな。あと俺の名前だが――」
「素直さは私の長所の一つです！　うふふ、名前の件は安心して下さい。先生も気軽に愛華って呼んでいいですからね！」
「は？　いや俺は、特定の生徒以外は名前で呼ばないようにして――」
「つまり先生にとって私は特別ってことですよね。禁断の関係ですね！」

立ち読みサンプルはここまで

「は？　姫川、お前、な、何か色々と心配な性格だな」
やだ先生ったら。私が外見だけじゃなく心まで綺麗だから、男子生徒に目を付けられないか心配なのね！
ああっ、本当になんて楽しい場所なのかしら！
何度繰り返しても、毎回違った一年になるんだからやめられない。今回も、また新しい一年が始まるんだわ。
女神様――ジュディによってお姫様に選ばれた私が愛され続ける、永遠の楽園。ここが今日から再び、綺麗な色に色付くの！
待っていてね、私の王子様達。早く私を見つけてね、新しい私の王子様。
お姫様はいつでも、王子様の愛を受け入れ、王子様を愛してあげる。
だから一緒に、この楽園で末長く幸せに暮らしましょう？
それが私にとっても王子様達にとっても、一番幸せで一番楽しい選択でしょう？
だってこの学園は、私のために女神様が創り出してくれた最高の楽園なのだから!!